

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	惟明親王の『正治初度百首』春歌について：構成と表現に着目して
Author(s)	北原, 沙友里
Citation	国文学攷, 251 : 62 - 78
Issue Date	2021-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052814
Right	Copyright (c) 2021 by Author
Relation	



惟明親王の『正治初度百首』春歌について

——構成と表現に着目して——

北原 沙友里

はじめに

『正治初度百首』（以下、正治百首とする）は、正治二年（一一二〇）に後鳥羽院が下命した百首和歌である。春二〇首・夏一五首・秋二〇首・冬一五首・恋一〇首・羈旅五首・山家五首・鳥五首・祝五首から成る部立百首で、作者は後鳥羽院・惟明親王・式子内親王・守覚法親王・良経・通親・慈円・忠良・隆房・季経・経家・釈阿・隆信・定家・家隆・範光・寂蓮・生蓮（師光）・静空（実房）・讃岐・小侍従・丹後・中納言得業信広の二三名である。本百首は、『新古今和歌集』（以下、新古今集とする）の選集資料となるなど、新古今時代の和歌を考える上で極めて重要な作品といえる。

本稿で取り上げる惟明親王（一一七九～一二二二）は、本百首の詠者の一人である。高倉天皇の三宮であり、後鳥羽院の異母兄に当たる彼は、官職に就いた形跡もなく目立った事跡はないものの、歌

人としては本百首の他に『千五百番歌合』（一二〇三年頃）への参加、新古今集以下の勅撰集に三四首入首するなど、異母弟である後鳥羽院ほどではないにしろ、歌人として非凡な才能を持った親王であったことが窺える。¹⁾

しかし、惟明親王を取り上げた研究はこれまで殆ど為されてこず、²⁾あまり日の目を見ることのないなかつた歌人であったが、田仲洋己氏が親王の正治百首を概観されている。田仲氏は、「幾つかの表現上の特色と傾き」を挙げられており、惟明歌の特徴として以下の四点を指摘されている。³⁾

- I 先行歌の発想や詞続きを無造作に取り込んだと思われる歌
- II 万葉語や難儀の類（院政期歌学書で考察の対象とされている語彙・万葉語・比較的耳慣れない名所歌枕）に対しての一定の関心

III 漢籍や王朝物語世界（『伊勢物語』・『源氏物語』）への志向

IV 同時代・近時代歌人たちの表現を取り入れる

これらの指摘は、概ね頷けるものであるが、親王の詠風や作歌態度を考察するためには惟明歌のより詳細な検討が必要であろう。

ところで、現存する惟明歌の殆どが二つの百首歌による³⁾。

百首歌は定数歌の一種であり、平安中期頃成立の『好忠百首』を嚆矢として、歌人の中で所謂初期百首が詠まれるようになった。初期百首はあくまで私的な色合いが濃いものであったが、院政期初めの『堀河院御時百首和歌』（以下、堀河百首とする）を契機として、公の性質を帯びると共に、基本的な部立や組題が形成されていくようになる。そして新古今時代になると、多くの歌人が公私を問わず、盛んに百首歌（定数歌）を詠むようになる。

定数歌である以上、百首歌は一首ずつ独立したものと捉えるのではなく、部立や百首全体をまとまりとして捉える視点が必要になってくると思われる。

親王は、本百首以前に公の場への出詠記録がない。年齢を考慮しても、本百首が和歌初学期の作であることはおそらく間違いないだろう。

本稿では、惟明親王のはじめての応制百首である正治百首の春歌二〇首を考察対象とし、I 歌材、II 表現の両面から構成や配列を考察していく⁵⁾。

一 春の部立構成

まず、惟明親王の春の部立構成を整理したい。なお歌に付した丸数字は私的に振ったものであり、部立内での位置を示す。

① 朝日さすみねのしら雪うちとけて風ものどけき千代のはつ春（一〇四）

② 千とせともかざらじものを子日して万代までものべの小松は（一〇五）

冒頭の二首（①・②）では、それぞれ「はつ春」、「子日」が詠まれ、新しい年や正月を言祝ぐ歌が置かれている。歌意に連続性は無いが、語句に着目してみれば「千代」、「千とせ」と類似表現を用いていることに気がつく。

③ わきて色のふかくみゆるや煙たつむろのやしまの霞なるらん（一〇六）

④ ながむればすまの浦路の春霞あかしにつたふあけぼのの空（一〇七）

続く③・④には霞を詠んだ歌を置く。それだけでなく、この二首は「みゆる」と「ながむ」という視覚的な歌であることや、室の八鳥、須磨、明石といった歌枕が使われている点でも共通していることが指摘できる。

⑤ 鶯のなみだのこほり打ちとけてふるすながらや春をしる

らん（一〇八）

⑥ つねよりも身にしむ物は梅がえの花よりちらすうぐひす
のこゑ（二〇九）

⑦ しるしらずおなじ心に野べに出でて昨日もけふもわかなを
ぞつむ（二一〇）

⑧ 梅が香はおのがたち枝にあくがれてをらぬ袖にもやどり
ぬるかな（二一一）

⑨ 月のもる軒端のむめの花ざかりをるてにかをる春のあは
雪（二一二）

⑤から⑨では鶯や梅が題材となる。まず⑤、⑥では鶯が詠まれて
いる。⑤は、「こほり打ちとけて」や「春をしるらん」という表現から、
春の訪れを詠んでおり、歌意から④までの春の初めを詠んだ歌との
繋がりが見出せる。逆に、梅の花と共に詠まれている⑥は、間に若
菜の歌を挟むものの、⑧以降の歌との繋がりを意識しているのだろ
う。⑧・⑨はどちらも梅の香を詠む。またそれぞれ「をらぬ袖」や
「をるて」に梅の香が移るという趣向も共通している。

⑩ いづくより花のにはひをささひきてさかぬ梢も風かをる
らむ（二一三）

⑪ 身にしてみてもやそうち人はかへれども花に匂ひは猶まさり
けり（二一四）

⑫ よし野山あらしや花をわたるらん木末にかをるはるの夜

の月（二一五）

⑬ 花さそふ風^⑬に春の空さえて枝よりつもる庭のしら雪
（二一六）

⑭ ちりつもる庭の花をもみるべきにいづち風^⑭のなほさそふ
らん（二一七）

⑮ さくら花^⑮ちる木のしたの旅ねには春をかたく心ちこそ
すれ（二一八）

⑩から⑭までは、ただ「花」と詠まれており、どのような花なの
かまでは明言されていない。しかし、梅の花盛りを詠んでいた⑨に
対し、⑩では「さかぬ梢」と詠まれていることから、ここで梅から
別の花へと歌材が移っていることがわかる。また⑫では桜の名所
である吉野山が詠まれており、一連の花が桜であることが自ずと想像
されるのである。

梅と桜、二つの花は、香で連接されている。⑧「梅が香」、⑨「て
にかをる」から、⑩「花のにはひ」「風かをる」と移っていき、⑫
から⑭まで桜の香を詠んだ歌が三首続く。

⑬からは桜が散ってゆく。⑬、⑭では共に風によって庭に散る桜
が詠まれる。⑮では、やはり散る桜が詠まれるが、その情景は庭の
ものではない。「旅ね」とあるように、旅の情景が詠まれている。

このように、⑤から⑭までの十二首は、隣り合う歌同士が、歌材
や語句、情景によって連結されている。

対して⑬から⑳までは、歌材の点からは共通点を見出し難い。

⑬ かり金のかへる名ごりにおもふかなこしぢの人の秋のころを（一一九）

⑭ おぼつかな草たつほどもいかならんかすみこめたるをぎのやけ原（一二〇）

⑮ 春といへばあはれおほかるながめかなあまのかご山あけぼのの空（一二二）

⑯ は帰雁の歌である。春になり北へと帰って行く雁を名残惜しみ、その心情から、去年の秋に雁を見送った北の国の人々の心中へ思いを馳せる。

⑰ では霞の立ち込める萩の焼原を詠み、⑱では明け方の天の香具山の情景を詠む。両者には一見何の繋がりも見出せない。しかし、霞を詠んだ歌（⑰）の後に、「ながめ」という詞を詠み込んだ歌（⑱）を置くという配列は、③、④とまったく同じである。先述の通り③・④でも霞を詠んだ歌が配列されていた。また、④と⑱は共に結句に「あけぼのの空」を置き、体言止めになっている点でも同じである。部立全体を俯瞰して見たときに、春の前半と後半に霞を詠んだ歌が置かれ、その後「なが」む、「あけぼのの空」を用いた体言止めの歌を置くという構造が読み取れるのである。

⑲ くれてゆく跡だにみえぬ春なればしたふ心もかひなかりけり（一二二）

⑳ いまはとてくれ行く春のふるさとに花ちるやどとならんとすらん（一二三）

部立末の⑲・⑳には暮春を詠んだ歌を置かれる。「くれてゆく跡だにみえぬ春」（⑲）、「くれ行く春」（⑳）と、この二首は表現の上でも非常に似通っていることが指摘できる。

以上の春の部立構成をまとめたものが、次の表①である。

【表①】春・部立構成

歌題	歌材	類似表現
② 立春	鶯	千代
③ 霞	鶯	千歳
④ 霞	鶯	みゆる
⑤ 鶯	鶯	ながむれ
⑥ 梅鶯	鶯	あけぼのの空
⑦ 若菜	梅が香	をらぬ袖
⑧ 梅	梅がえの花	をるて
⑨ 梅	むめ	
⑩ 桜	かをる	
⑪ 桜	花のにはひ	
⑫ 桜	花に匂ひ	
⑬ 桜	花	あらし
⑭ 桜	木末にかをる	庭
⑮ 桜	花	庭
⑯ 萩	さくら花	ちりつもる
⑰ 萩	萩	ちる
⑱ 天の香具山	かすみ	ながめかな
⑲ 暮春		あけぼのの空
⑳ 暮春		暮れてゆく春

【表②】春・堀河題との比較

	惟明・春	堀河題
①	立春	立春
②	子日	子日
③	霞	霞
④	霞	鶯
⑤	鶯	若菜
⑥	梅・鶯	残雪
⑦	若菜	梅
⑧	梅	柳
⑨	梅	早蕨
⑩	桜	桜
⑪	桜	春雨
⑫	桜・月・嵐	春駒
⑬	桜・嵐	帰雁
⑭	桜・嵐	喚子鳥
⑮	桜	苗代
⑯	帰雁	萱菜
⑰	霞・荻の焼原	杜若
⑱	天香具山	藤
⑲	暮春	款冬
⑳	暮春	三月尽

表①に示した通り、この春部では歌の題材が限定的なものになっている。題詠の規範となる堀河百首の春部と比較したものが表②である。両者を比較すると冒頭三首までは題が一致するが、堀河百首題が「残雪」や「柳」、「春雨」、「春駒」等、春の題を満遍なく取り上げているのに対し、惟明親王の春部では季節の流れに沿うという前提は同じでも、その題材が大きく偏っており、特定の歌材しか詠んでいないことが明らかである。また、歌材のみならず表現の上でも類似の詞を用いる傾向にあるようである。⁷⁾

この点から考えても、親王が配列になんらかの意図を持っていたことが推察される。

そして、この歌材や配列という点から春の部立て目を引くのが、⑩から⑮まで桜を六首連続して詠んでいることである。

正治百首に詠進している他の歌人の百首歌を見てみると、例えば俊成や式子内親王の百首歌にも花歌群がある。⁸⁾

まず俊成の花歌群を以下に掲げる（春七首目から十七首目）。

- ⑦ **梅**のはなさきぬる時はおしなべて春の空さへにはふなりけり（一一一〇）
- ⑧ むかしよりいかに契りて**梅**の花色に匂ひをかさねそめけん（一一一一）
- ⑨ さほ姫の春のすがたやこれならんつかしくもある玉柳かな（一一一二）
- ⑩ はるさめのしづかにそくけしきにてあまねき御代は空に見えけり（一一一三）
- ⑪ うれしくも我が君が代の春にあひて風しづかなる**花**を見るかな（一一一四）
- ⑫ 雲やたつ霞やまがふ**山**ざくら花より外もはなとみゆらん（一一一五）
- ⑬ 名にたかきよしの山の春よりや雲に**桜**をまがへそめけむ（一一一六）
- ⑭ たましきや風しづかなる**花**のもと心もちらぬ物にぞ有りける（一一一七）
- ⑮ しら川のむかしはまづぞ思ひいづるうれしき春の**花**を見るにも（一一一八）
- ⑯ **花**ははる春は**花**をやおもふらん時も草木もちぎりしあれば（一一一九）

①⑦ 君が代はみでの山吹さきそひて千世をかかさぬる玉水のかげ(一一二〇)

右に掲げた通り、俊成は花歌群の冒頭(⑦・⑧)で梅の花を詠み、その後、春雨の歌(⑨・⑩)を置いた後、⑪から⑬まで花の歌を六首続け、歌群の最後は山吹の花で締められている。⑪の「花」は桜であるとはっきり断定はできないが、続く⑫では「山ざくら」とはっきりと詠まれ、以降桜の花が続くことから、⑪から⑬までは桜歌群だと判断して良いだろう。桜の歌を連続して何首も置くという点では、惟明親王と同様である。

次に式子内親王の花歌群である(春七首目から一六首目)。

⑦ 袖のうへにかきねの梅はおとづれて枕にきゆるうたたねの夢(二〇八)

⑧ ながめつるけふはむかしに成りぬとも軒ばの梅はわれをわするな(二〇九)

⑨ いまさくらさきぬと見えてうすぐもり春にかすめる世の気色かな(二一一〇)

⑩ まつほどの心のうちに咲く花をつひによし野へうつしつるかな(二一一一)

⑪ 峰の雲ふもとの雪にうづもれていづれを花とみよし野の里(二一一二)

⑫ 高砂の尾上のさくらたづぬればみやこのにしきいくへか

すみぬ(二二三)

⑬ とふ人の折らでをかへれうぐひすのは風もつらき宿の桜を(二一四)

⑭ 霞ゐるたかまの山のしら雲は花かあらぬかかへるたび人(二一五)

⑮ 夢のうちもうつろふ花に風吹きてしづこころなき春のうたたね(二一六)

⑯ 今朝みればやどの木ずゑに風過ぎてしられぬ雪のいくへともなく(二一七)

式子内親王の花歌群も俊成同様梅から始まる。梅(⑦・⑧)の後には桜の花が八首連続(⑨から⑬)して置かれる。

惟明親王の花歌群も梅から始まり、桜の花へと移行していく。その点では俊成や式子内親王の本百首とも似通っている。惟明親王の花歌群が他二人と比べて異彩を放っていると思われる点は、親王が梅と桜の連接に香を用い、桜の香を詠んだ歌を続けていることだと考えられる。

俊成の桜歌群には香を詠んだ歌は置かれていなかった。式子内親王の花歌群では、梅と桜の連接に「ながめ」「見え」と視覚的な歌を配置し、その後の桜歌群もやはり視覚的な歌が置かれ、香を詠んでいるものは一首もない。

対して、惟明親王は梅から桜への移り変わりを香という嗅覚表現

に託し、桜歌群の冒頭に香を詠んだ歌を三首(⑩から⑫)置く。このような構成は俊成や式子内親王の歌群には見つけられないものである。

なお、本百首において桜の香を連続して詠んでいる歌人としては他に守覚法親王が挙げられる。次に守覚法親王の花歌群を掲げる(春の九首目から十九首目)。

- ⑨ 春の色もさかずはいかがしりそめん梅よりさきに花なかりけり(三二二)
- ⑩ ながめてもいかにかたらむ梅がえの花に月もる春の明けほの(三二三)
- ⑪ この本に花まぢかねてながむればおも影よりぞさきはじめける(三二四)
- ⑫ 桜さくみねたちはなれゆく雲はせめても花におもひわけとや(三二五)
- ⑬ さらにぬだにをしきなごりをいかに又花よりもろき雪とみゆらん(三一六)
- ⑭ いはがねにましばをりしき明けにけりよしののおくの花のしたふし(三二七)
- ⑮ けふも又あかぬながめにくればてぬあはれたちうき花のかけかな(三二八)
- ⑯ 家つとに花をつつみてかへるさにはひぞ袖にもれてち

りける(三二九)

⑰ ちりまがふはなのふぶきにかきくれて空までにほふしがの山(三三〇)

⑱ いまぞしるたこのうら藤さきにけり音せて浪はよするものかな(三三一)

⑲ 岩代のはま松がえの藤のはなこれさへたれかむすびかけん(三三二)

守覚法親王の花歌群でも先頭に置かれるのはやはり梅(⑨・⑩)である。⑪その後桜の歌が七首(⑪から⑰)置かれた後、藤の花(⑱・⑲)へと移っていく。守覚法親王も桜の歌を連続して詠んでいるが、注目したいのは、⑯・⑰と二首続けて桜の香が詠まれていることである。⑯では袖に移った香を、⑰では花の香が空まで薫るのではないかと詠まれている。

田仲氏は特徴の二点目として挙げている万葉語や難儀の語への一定の関心について守覚法親王周辺からの影響を想定されているが、桜の香を連続して配置するという、歌の構成に関わる面においても、あるいは守覚法親王からの影響が認められるだろうか。

とはいえ、両者の歌の情景を比べてみると、三首とも風に薫る花を詠んでいた惟明歌とは守覚法親王の二首はどちらも情景が異なっている。桜の香を連続して置き、かつその歌の内容にも類似が認められるという点で、他の歌人の桜歌群とは異なっている。次節では

この桜歌群について、もう少し掘り下げていきたい。

二 風に薫る桜歌群

桜は『古今和歌集』（以下、古今集とする。その他の勅撰集も同様に省略して示す）以来盛んに詠まれてきた花であり、その用例は枚挙に暇がないが、香りを詠んだ歌に限定するとその数はそう多くはない。表③は、古今集から千載集までの勅撰集で、桜の歌及びそ

【表③】勅撰集の桜歌

	桜歌	桜の香
古今	53	1
後撰	34	3
拾遺	58	0
後拾遺	75	0
金葉	52	3
詞花	33	1
千載	76	2

の中で桜の香を詠んだ歌をまとめたものである。^③桜の香を詠んだ歌は各集にから三首あるかないかで、総数で見ても十首程度しかない。以下それらの歌を挙げる。なお各歌には便宜上ア〜コの記号を振った。

さくらの花のもとにて年のおいぬることをなげきてよめる

ア いろかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける（古今集卷一・春上・五七・きのともり）

貞観御時、ゆみのわざつかうまつりけるに

イ けふ桜しづくにわが身いさぬれむかごめにさそふ風のこぬ

まに（後撰集卷二・春中・五六・河原左大臣）

御返し

ウ 句こぎ花のかもてぞしられるうゑて見るらんひとの心は

（後撰集卷二・春中・六九）

寛平御時、桜の花の宴ありけるに、雨のふり侍りければ

エ 春さめの花の枝より流れこは猶こそぬれめかもやうつると

（後撰集卷三・春下・一一〇・藤原敏行朝臣）

花薫風といへることをよめる

オ よしのやまみねのさくらやさきぬらんふもとのさとにには

ふはるかぜ（金葉集卷一・春部・二九・摂政左大臣）

堀河院御時中宮御方にて風閑花香といへる事をつかう

まつれる

カ 木ずゑにはふくとも見えてさくら花かをるぞかぜのしるし

なりける（金葉集卷一・春部・五九・源俊頼朝臣）

新院北面にて残花薫風といへる事をよめる

キ ちりはてぬはなのありかをしらすればいとひしかぜぞけふ

はうれしき（金葉集卷一・春部・七〇・中納言雅定）

落花満庭といふことをよめる

ク にはもせにつもれる雪とみえながらかをるぞはなのしるし

なりける（詞花集卷一・春・四三・花蘭左大臣）

近衛殿にわたらせたまひてかへらせ給ひける日、遠尋

山花といへる心をよませ給うける

ケ たづねつる花のあたりにけりにけりにほふにしるし春の山

かぜ(千載集卷一・春歌上・四六・崇徳院御製)

(崇徳院に百首歌たてまつりける時、花のうたとてよめる)

コ 山ざくらかすみこめたるありかをばつらきものから風ぞし
らする(千載集卷一・春歌上・五七・前参議教長)

アは、老いる自分と、色も香も昔と変わらない桜とが対照的に詠まれ、イ・エは濡れた桜の香を詠む。ウは返歌らしく「花の香を以て人を讃える」歌となっている。また、クでは、雪と見紛うばかりの庭一面の落花が、その香のために花だとわかると詠まれている。

対して、金葉集の三首(オ・カ・キ)は、それぞれの「花薫風」、「風閑花香」、「残花薫風」という題から明白なように、風に薫る桜の花を詠んでいる。千載集の二首(ケ・コ)も、「にはふにしろし春の山かぜ」、「風ぞしらす」という語句から、やはり風によって運ばれる桜の香を詠んでいる。この風が桜の香を運ぶという点で、惟明歌は金葉集や千載集の歌と似通っている。

田仲氏は惟明親王の正治百首の特徴の四ポイントとして「IV 同時代・近時代歌人たちの表現を取り入れる」を挙げていたが、この歌群の風に香る桜という趣向も、金葉集や千載集などの近い時代の勅撰集から発想を得たものと考えられるだろうか。

また、惟明親王の桜歌群の語句に着目すると、⑫の「木末にかをる」という表現について、田仲氏は次のように指摘する。

第四句の「梢にかをる」はやはり類例の少ない秀句表現であり、僅かに建久元年『花月百首』の藤原定家詠を見出すばかりである。

田仲氏が指摘する歌は以下のものである。

あくがれし雪と月との色とめて梢にかをる春の山かげ(六〇八)『花月百首』の他の歌を見てみると、この歌の他に、

桜花さきにし日より吉野山空もひとつにかをる白雲(六〇一)
花の香はかをるばかりを行へとて風よりつらき夕やみの空
(六二七)

のように、花の香を詠んだ歌は何首か散見される。しかしながら、定家の『花月百首』は桜の香を詠んだ歌を連続して置くような配列にはなっていない。

つまり、風によって運ばれる桜の香や「木末にかをる」という表現には、金葉集や千載集、あるいは定家からの影響を見出せる。その一方で、桜の香を連続して置くという配置はこれらの先行例にはないものである。

ここで正治百首が選集資料となった、新古今集の桜歌についても確認しておきたい。

表④に示したように、新古今集では桜を詠んでいる歌が一三首確認でき、千載集までと比してもその数が増している。しかし、桜の香を詠んだ歌は四首のみであり、

【表④】新古今集の桜歌

桜歌	113
桜の香	4

やはり桜の香が詠まれることは珍しかったようである。ただし、この四首のうち三首は連続して置かれている点には注意が必要であろう。以下にその三首を引用する。¹⁵⁾

サ 花のかにころもはふかくなりにけりこのしたかげの風の

まにまに（巻第二・春歌下・一一一・貫之）

千五百番歌合に

シ 風かよふねざめのそでの花のかにかをるまくらの春の

夜の夢（巻第二・春歌下・一一二・皇太后宮大夫俊成女）

守覚法親王、五十首歌よませ侍りける時

ス このほどはしるもしらぬも玉梓のゆきかふ袖は花のかぞ

ずる（巻第二・春歌下・一一三・藤原家隆朝臣）

新古今集の春部では巻第一の七九から桜歌群が始まり、そのまま巻第二に入り、一五八まで続く。実に八十もの桜の歌が続くこの歌群中で香に焦点が当てられているのはこの三首だけである。

歌の内容を見ていくと、情景はそれぞれ異なるもののすべて衣への移り香を詠む。シの歌は、元の『千五百番歌合』では梅の香を詠んでいた歌だった。それをあえて桜歌群のこの位置に配列していることから考えても、撰者の意図が桜の香、それも衣への移り香にあることは明白だろう。前節で取り上げた守覚法親王の正治百首にも、桜の香を詠んだ歌が二首確認できたが、そのうちの一首は「にほひぞ袖にもれて」とやはり衣への移り香が詠まれていた。

守覚法親王の百首歌や新古今集の桜の香の歌を勘案するに、同時代に桜の香を連続して詠む配列というのは珍しいながらも散見され、この一点のみで惟明親王独自の趣向とは言えない。しかし、香の詠まれ方に着目してみると、同時代の趣向は衣への移り香であり、その点において惟明親王の詠み方は同時代のそれではなく、むしろ金葉集や千載集などやや前の時代の詠みぶりに似通っていると言え、そこに独自性を認めることができるだろう。

三 先行歌撰取の表現―春部前半―

前節で取り上げた桜歌群で、惟明親王は桜の香を連続して置くという同時代に少ないながらも見られた配列を採用する一方で、情景の詠みぶりは同時代のものとは変えるという趣向を凝らしていた。

ここから、本百首の春部において、親王の工夫は歌の表現に込められているのではないか、あるいは表現と配列を見比べることで、新たな工夫が見出せるのではないかと考える。

そこで本節では、春部前半（①から⑨）の歌の表現に着目して、考察を行う。

冒頭の①について、田仲氏は、上句は『和漢朗詠集』等に採られている平兼盛の著名な歌、

あさひさすみねのしらゆきむらぎえてはるのかすみははやたち
にけり（春・霞・一〇四）

を踏襲したものの、下句は『文治六年女御入内和歌』の九条兼実の歌、

桜山野井人家に桜盛にさきたる所かすみ有り

さくらばなかせものどけきみ世に逢ひてちらぬ春をしかさぬべ

きかな

などの近い時期の先行歌に見られる表現を用いているとして、「先行歌の表現にはほぼ全面的に依拠した平凡な詠み振りの一首である」と評している。

②も和歌文学大系の注で本歌として拾遺集の能宣の歌、

入道式部卿のみこの、子の日し侍りける所に

ちとせまでかぎれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ

(巻一・春・二四)

が挙げられているように、本歌の表現をほぼそのまま流用したものになっている。続く③の歌も、田仲氏は藤原清輔の次の歌、

朝がすみふかくみゆるやけぶりたつ室のやしまのわたりなるら

ん (『久安百首』・春二十首・九〇五)

を引きながら「一首全体の趣向や詞続きが(中略)酷似することは否定できない」と述べる。このように、冒頭の三首に、先行歌の表現に大きく依拠した歌を置いてしまっている。

しかし、④については明石巻で源氏が詠んだ

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして
の「詞続きを取り入れつつ、須磨巻近くで語られる海岸での場面に

おける光源氏の詠歌としても相応しい歌境を構築したのが、当該の惟明詠であると理解してよいのではあるまいか」と物語取りの和歌として田仲氏は一定の評価を与えている。

このような、先行歌の表現をそのまま詠んでしまった稚拙な歌の後に、先行歌の表現を巧く取り込んだり、秀句的な表現を用いたりした歌を置くという配列が前半は続いていく。

⑤は「鶯のなみだのこほり」という表現は、当然古今集所収の「雪の内に春はきにけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ」(春上・四・藤原高子)が想起され、さらにこの歌を踏まえた「うぐひすはこほるなみだのとくるにやゆきふるすにてはるをしるらん」(『経正集』・春・鶯・三二)と表現がほぼ似通っている。⁶⁾

続く⑥はどうだろうか。「身にしむ」という表現は、多くが秋の歌として風と共に詠まれてきたが、春歌の例もいくつもあり、その中でも惟明歌同様鶯の声が「身にしむ」と詠む例は、次の三首がある。鶯の初音や何の色ならむきけば身にしむ春の曙

(『袋草紙』・七一・右衛門尉孝善)

(鶯の家花中に鶯ある所)

うぐひすのこほりのいろさへ身にしむははなのたよりにきけばな
りけり (『文治六年女御入内和歌』・三八・隆信)

わが宿は谷のふるすを隣にてふかくみにしむうぐひすの声
(『若宮杜歌合』・二番・四・藤原隆信)

しかしながら、右の三首はどれも「梅がえの花よりちらすうぐひすのこゑ」と詠む惟明歌とは詠みぶりを異にしている。そもそも「花よりちらす」という表現は、管見の限り他に例を見ない。鶯と梅はよくある取り合わせであるが、もっぱら鶯が梅の花を散らすのである。例えば古今集所収の素性の歌、

うぐひすのなくをよめる

こづたへばおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなく
らむ（巻第一春歌上・一〇九・そせい）

では、鶯自身の羽風によって花が散っていくのを誰のせいにして鳴いているのだろうか、と詠む。鶯自身が花を散らしながらも、一方で鶯は散る梅を惜しみ、だからこそ鳴いている。この歌の前後にはそのように梅の花を惜しんで鳴く鶯の歌が並ぶ。

題しらず

鶯のなくのべごとにてきて見ればうつろふ花に風ぞふきける

（二〇五・よみ人しらず）

吹く風をなきてうらみよ鶯は我やは花に手だにふれたる

（二〇六）

ちる花のなくにしとまる物ならば我鶯におとらましやは

（二〇七・典侍治子朝臣）

仁和の中将のみやすん所の家に歌合せむとてしける時によ
みける

花のちることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすのこゑ

（二〇八・藤原のちかげ）

鶯の花の木にてなくをよめる

しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならな
くに（一一〇・みつね）

惟明親王の該当歌では「梅がえの花よりちらすうぐひすのこゑ」という詞続きで、そのまま受け止めれば、梅の枝に止まっている鶯の声がまるで花からふりまいてるように聞こえてくる、という情景だろう。梅の花も声と共に散っていると考えるかは難しいところだが、直前の⑤の歌で鶯の初音を詠み、この後の⑧・⑨でも梅の歌が続くことを踏まえると、ここではまだ梅の花は散っていないだろう。そうすると、散る花を惜しんで鳴いている鶯の声が「身にしむ」わけではない。この歌で「身にしむ」と表現されている鶯の声とは、「身にしむ」の用例で詠まれていた鶯の初音ではないだろうか。そう考えると前に置かれた⑤の歌とのつながりも増す。

⑧と⑨も同様の配列である。⑧の上句は、千載集所収の、

梅花夜薫といへるころをよめる

むめがかはおのがかきねをあくがれてまやのあたりにひまもと

むなり（春上・二六・源俊頼朝臣）

にはぼ一致し、下句は金葉集の、
梅花夜にはふといふことをよめる

むめがえにかぜやふくらん春の夜はをらぬ袖さへにほひぬるか
な(二度本・春・一八・前大宰大式長房)

に似通い、元歌の表現を切り貼りしただけの平凡な歌である。

対して、⑨は月光に照らされた盛りの白梅を「春のあは雪」に見立て、その梅の香を「をるてにかをる」と表現する。この表現もやはり他には見えないが、類似の表現として寂蓮の次の歌が挙げられる。

春風はたもとにかをるむめがえををるてにうつるうぐひすのこ
ゑ(『寂蓮無題』百首)・四)

寂蓮歌は「たもとにかをる」「をるてにうつる」と詠み、梅の香と鶯の声という嗅覚と聴覚に拠った。一方、惟明親王の当該歌は「春のあは雪」に見立てた白梅を「をるてにかをる」と表現し、嗅覚と視覚に訴える歌を詠んでいる。

四 先行歌撰取の表現―春部末―

次に春部末(⑬)～(⑳)の歌の表現を見ていく。

この五首のうち⑬「春といへば」は和歌文学大系が「同時代に多く詠まれた表現」と注を付けている。⑳についても、田仲氏が拾遺集の貫之歌に「殆ど模倣に等しいような歌い直し」と評しながらも、「春のふるさと」という表現が近い時期の先行歌に何首かあることを指摘した上で、「新風歌人好みの秀句的表現として位置付けられ

よう」と指摘している。

このように、春の終わりの歌にはとりわけ同時代の和歌表現が見られる傾向にあるようである。指摘がないその他の三首についても見ていきたい。

⑯は帰雁を詠んだ歌で、結句に「秋のころを」と詠まれる。正治百首に同じく帰雁の歌で「秋のころ」を詠んでいる歌がある。定家の鳥題の四首目である。

いかにせんつらみだれにし雁がねのたちどもしらぬ秋のころを(一三九七)

この句について山崎桂子氏は、『和漢朗詠集』の小野篁の詩、物色は自ら客の意を傷ましむるに堪へたり
宜なり愁の字を將つて秋の心に作れること

と、右の詩を踏まえた千載集の次の歌を引いて、論じている。⁵⁷⁾

崇徳院に百首歌たてまつりける時、秋のうたとてよめる

ことごとかなしかりけりむべしこそ秋の心をうれへといひけ

れ(巻第五・秋歌下・三五五・藤原季通朝臣)

山崎氏はさらに定家が繰り返し「秋のころ」という表現を詠んでいることを踏まえ、「秋のころ」という表現を含む、定家の歌四首は、さながら不遇な彼の半生をたとらせてくれる」と述べている。

惟明親王は、定家のようにこの語を繰り返し用いているわけでも

自身の半生を重ねているわけでもない。あくまで「こしぢのひとの」心情として「秋のころ」を詠んだに過ぎない。しかし、定家が心を寄せていた「秋のころ」という表現を、若輩の惟明親王も同じ帰雁の材で選んでいるところに、親王の非凡さが少なからず感じられる。また、篁の詩中にある「客の意を傷ましむるに堪へたり」は、桜歌群の最後「旅ね」にも通ずる心情でもあり、百首歌の並びの中で「秋のころ」という表現を見たときに、前の歌とのつながりを読み取ることが可能になり、同時代の表現を自身の百首歌の配列に落とし込むことに成功していると言えるのではないだろうか。

次に㊸の「草たつほど」という表現は、『六百番歌合』の経家歌が初出になる。

色色のはなさくべしと見えぬかなくさたつほどの野への気色は
(廿三番・右・四六)

この歌は判詞で「判云、此両首、共に古今集、みどりなる一草とぞ春は見しといへる歌の心なるべし、幾の勝負なきにや、但、右、草立つ程の、詞不被庶幾にや」と指摘されているように古今集の次の歌を踏まえている。

題しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける
(秋歌上・二四五・よみ人しらず)

古今集所収歌も、経家歌も春の野の緑を見て、秋の色とりどりの花々

に思いを馳せているが、惟明歌では霞が立ちこめているために荻の新芽が出ているかどうかも「おぼつか」ないのである。結句の「をぎのやけ原」は後撰集の兼盛歌「けふよりは荻のやけ原かきわけて若菜つみにと誰をさそはん」(巻第一・春上・三)が有名だが、霞を共に詠んだ例としては、

大納言実房家に十五首よませ侍りに、霞を

と山には霞しにけり何方か我がしめし野のをぎのやけ原

『林葉和歌集』・一八

はるばるとをぎのやけはらたつびばり霞のうちにこそあがるな

り(『六百番歌合』・十七番・左持・九三・季経)

など、いずれも近い時期の歌が挙げられる。しかし、「草たつほど」も「をぎのやけ原」も先行例とは詠みぶりが異なったものとなっており、前半に多々見られた先行歌の表現を取り込んだだけの歌に比べ、作者の意欲が強く感じられる。

最後に暮春を詠んだ㊸の歌は、和歌文学大系が補注で「季節の移ろいをさやかに見ることはできない。(中略)目に見えぬ春を慕うことへの諦観を含みながら、去りゆく春を惜しむ」と述べ、『風情集』の「こころみにひきやとめましくれてゆく春のすがたのあらはなりせば」(三三五)を例に挙げる。季節に対して「したふ心」と詠む例は以下のようなものが挙げられる。

九月尽をよめる

すぎて行く秋をもなにかうらむべきしたふ心にとまりやはする

〔『経盛集』・六五〕

（百首歌中に、秋のくれの心をよめる）

雲路をや暮れゆく秋はかへるらんしたふ心の空になるかな

〔『玄玉和歌集』・四四〇・顕昭法師〕

さ夜ふくるかねのおとにはゆく春をしたふころもつきはてに

けり〔『千五百番歌合』・二百八十六番・右・五七一・通光卿〕

用例はやはり近い時期のものに限られるが、先行する二例はどちらも暮秋の歌である。『千五百番歌合』の通光歌は惟明歌とどちらが先行するか判断がつきかねるが、どちらも暮春を詠み、また下句の表現も「心もかひなかりけり」「ころもつきはてにけり」と似通っているとある。

以上、春部末の五首の表現を見てきたが、いずれの歌にも同時代や近時代の和歌表現が使われていることがわかった。しかしながら、先行歌の表現を無造作にそのまま取り込んだ歌が多かった前半に比べて配列や歌の情景に工夫が読み取れ、後半には同時代に例が見られる表現を用いつつ、先行歌に大きく依拠することなく詠じた歌を配列していると言えよう。

おわりに

本稿では惟明親王の正治百首から春の歌二十首を取り上げ、考察

を行ってきた。

まず春の部立の構成については、歌材や語句、情景などによって隣り合う歌同士が結びつけられており、そこには一定の配列意識が確かに読み取れる構成になっていた。惟明親王の百首歌の傾向の一つとして、部立内で同一歌材の歌を複数詠むことが指摘できるが、この傾向が春部でも顕在であったといえる。

春部の構成について他に特筆すべきことは、特に桜の歌を連続して配列し、その歌群の中ではさらに桜の香を三首続けて詠んでいたということである。桜の香を詠むこと自体が和歌史において稀であるが、守覚法親王の正治百首や新古今集の春部の例からわかるように同時代においてはけっして突飛な発想ではなかったようである。しかしながら、この時代において桜の香は衣への移り香と結びつけられていた。親王は、風に薫る桜の香という金葉集や千載集に見られた情景を詠んだ歌を並べて配列することで、同時代の傾向との差別化を図ったものと考えられる。

また、前半には先行歌の表現をそのまま取り込んでいるだけの歌が目立ったが、部立末尾には、同時代の新奇な語句や表現を取り入れたつつ、先行歌とは異なる詠みぶりの歌が集中して置かれていた。このような構成に意図を読み取れるか、即ち先行歌の摂取の方法が配列意識と直接的に結びついているかは、他の部立や『千五百番歌合』の百首歌とも見比べる必要があるため、すぐには結論を出せない

いが、例えば惟明親王の本百首の秋の歌に次のような歌がある。

衣うつきぬたの音をしるべにておきみの里をたづねつるかな

(一五四)

右の歌は、秋部の一六番目に置かれている。この歌の直前までは月の歌が五首、この歌の後には菊の歌が二首置かれ、一見するところの歌だけが前後の流れの中で浮いてしまっているような印象を受ける。

しかし、四句目の「おきみの里」という歌枕が鍵となって月歌群の一首として捉えることが可能になる。

「おきみの里」という語はあまり耳慣れぬ歌枕ではあるが、表現の典拠となったと考えられる次の歌をはじめ、月と共に詠まれることが一般的だった。

月前擣衣

月かげにあきのよすがら **おきみつ** つうつころもでにしもやおくらむ (『在良集』・一一)

親王にはもう一首、「おきみの里」を詠んだ例があるが、そちらの歌ではやはり月と共に詠まれている。

おきみのさと、陸奥

九月十三夜十首御歌、里月、明玉 第三のみこ

よもすがらたもにつたふ白露の **おきみのさと** に月を見るかな

(『夫木和歌抄』巻第卅一・雑部十三・二四六八一)

この秋の歌のように、表現が配列と直結している例をいくつか見つけられることができる。どこまで意図的だったか、あるいは百首全体の傾向として捉えられるかは判然としないが、惟明親王の中には表現と配列が直接的に結びつく意識が少なからずあったのではないかと推察されるのである。この点は今後の課題としたい。

注

(1) 勅撰集への入首状況は、新古今集六首、新勅撰集一首、続後撰集三首、続古今集二首、続拾遺集二首、新後撰集三首、玉葉集四首、続千載集二首、続後拾遺集二首、新千載集二首、新拾遺集一首、新後拾遺集二首、新続古今集四首。

(2) 惟明親王を取り上げた研究には、以下のものがある。

山崎桂子「憂しといひてもあまる涙を―惟明親王逸文歌考証―」(『広島女子大国文』一〇号、一九九三年九月)、「惟明親王歌逸文考証」(『和歌文学研究』六八号、一九九四年五月)、「三宮惟明親王伝―誕生から寿永二年まで―」(『国語国文』六四号、一九九五年五月)、『正治百首の研究』(勉誠出版、二〇〇〇年二月)

田仲洋己「三宮惟明親王歌の正治初度百首詠について」(『中世前期の歌書と歌人』和泉書院、二〇〇八年)・初出『岡大國文論稿』三四号、二〇〇六年三月

久保田淳他『和歌文学大系49 正治二年院初度百首』(明治書院、二〇一六年)・惟明親王の百首歌は木下華子氏が担当している。

(3) 注(2) 掲出論文

(4) 山崎桂子氏の考証によると、現存する惟明親王歌は二〇九首である。な

お家集は伝わっていない。

(5) 『正治初度百首』は宮内庁書陵部蔵本『正治百首』(五〇一・九〇九)に抛り、引用は便宜上、書陵部本を底本とする『新編国歌大観』(CD-ROM版 ver.2)を用い、〇内に歌番号を示した。その他の和歌の引用については、『新編国歌大観』(CD-ROM版 ver.2)に拠った。また引用文には私的に傍線や囲みを付している。

(6) 二句目「みえぬ」の「え」の横に「せい」という書入あり。

(7) ⑦若菜、⑩帰雁の二首は前後の歌との繋がりが見出せず、配列の中で浮いてしまっている印象を受ける。他の部立でもこのような歌が数首散見された(例えば秋部など)ため、全体としての配列意識は認められるものの、和歌初学期の詠ということで稚拙さが出てしまったか。

(8) 俊成の『久安百首』や『式子内親王集』所収の二種の百首歌にも同様の傾向があり、この二人は一つの百首内で、同一の歌材の歌を連続して置く傾向が少なからずあったことが類推される。

(9) 他に春の十九首目では藤の花が詠まれている。

(10) 四句目「にほふ」の横に「かほる」と書入あり。

(11) なお春の六首目にも梅を詠んだ歌「かをとむるたよりにきなけ鶯のすきうかるべき梅のたち枝ぞ」が置かれる。

(12) 『新編国歌大観 CD-ROM版』、岩波書店の新大系、有吉保氏の「八代集四季歌各季の歌題排列一覽」(『新古今和歌集の研究 基盤と構成』所収)を参考に検索したものに、「花」が詠まれている歌の内、桜歌と見なせるものを適宜加えた。また『金葉集』は二度本を使用した。

(13) 贈歌は次の通り。

衛門のみやすん所の家うつまさに侍りけるに、その花おも

しろかなりとてをりにつかはしたりければ、きこえたりける

山ざとにちりなましかば桜花にはふさかりもしられざらまし

(六八)

(14) 工藤重矩校注『和泉古典叢書 後撰和歌集』(和泉書院、一九九二年)

(15) なお桜の香を詠んだ残りの一首は、次の和泉式部の歌である。
敦道のみこのともに、前大納言公任の白河の家にまかりて、
又の日、みこのつかはしける使につけて申し侍りける
をる人のそれなるからにあぢきなく見し我がやどの花のかぞする

(巻第十六・雑歌上・1459)

(16) 和歌文学大系の注では前者を本歌、後者を参考歌とする。

(17) 山崎桂子「正治初度百首鳥歌の考察」・俊成・定家一紙両筆懐紙を中心に『国文学攷』一二四号、一九八九年二月)

なお『和漢朗詠集』の引用は、菅野禮行校注・訳『新編日本文学全集和漢朗詠集』(小学館、一九九九年一〇月)に拠った。

(18) 惟明親王の正治百首の他の部立にも同様の傾向が看取される。

拙稿「惟明親王の『正治初度百首』夏・冬歌について」・更衣と網代の歌を中心として(『表現技術研究』一三号、二〇一八年三月)、「惟明親王の『正治初度百首』恋十首について」・配列の視点から(『表現技術研究』一五号、二〇二〇年三月)等

——きたはら・さゆり、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学——